

大岡昇平「野火」手稿

——『展望』初出第三回分について——

一

大岡昇平（明42（一九〇九）～昭63（一九八八））の『野火』は、はじめ『文體』第三、四号（昭23・12、昭24・7）に発表されたが、雑誌廃刊のため中断、『展望』誌上であらためて冒頭から連載開始されたのは昭和二六年一月号からであった。（よく知られているように、この折、当初存在したジャーナリストの「私」による主人公田村の紹介部分、いわゆる「初出導入部」は削除され、現行の形となった。）この『展望』への掲載は全八回、八月号まで続き、昭和二七年二月に単行化された。

『展望』の手稿は、第五回分から第八回分（「終回」）までは、神奈川近代文学館に収蔵されている。

ここで採りあげるのは第三回分（『展望』昭和二六年三月号掲載分）である。当該原稿は平成一三年に刊行された保昌正夫監修／青木正美収集・解説の『近代作家自筆原稿集』（東京堂出版）

花崎 育代

に冒頭一枚目部分の影印が掲載されていた原稿である。このたび筆者がこの原稿について考察し得るのは以下の経緯によって全文の閲覧が可能となったためである。

二

作家の手稿は美術的価値を有するものとして観賞し得るものであるとともに、作品生成過程を探究し得るテクストでもある。とりわけ、後者の観点に立った場合には、昨今の草稿研究の隆盛というだけではなく、その保管保存をも含めた公共性が問題となる。そこでここではやや煩瑣にはなるが、該原稿について詳しく記しておく。

戦後文学の代表的作品と言える大岡昇平『野火』の、『展望』第三回掲載分が一般読者の前にあらためて登場したのは平成二五（二〇二三）年七月のことであった。東京神田小川町の東京古書会館にて開催の第四八回明治古典会七夕古書大入札会の出品目録

に掲載されたのである。大岡昇平の原稿草稿類の多くは県立神奈川近代文学館が所蔵している。とりわけ『展望』掲載の「野火」原稿に関しては、先述もしたように同館が第五回（第八回（終回）を有しており、当然、今次あらわれた第三回分も同館が購入するものと考えていた。しかし書店を通して確認したところ、同館は購入の意向がないということである。目録のかたちでこの原稿の存在が公開されたのもそれゆえのことである。このことが判明したのは入札会の僅か三日ほど前であった。筆者は入札システムには全く明るくないのであるが、公に市場にあらわれた以上、美術品としての鑑賞のみならずその利用法の自由も含め、購入による私有化は当然ながら合法的なものとなる。該手稿が公的な施設以外に落札された場合、開かれた研究は困難とならざるを得ないであろう。

市場に出た段階で、高価ではあれ、むろん、筆者も私的に購入したい欲求がなかったとはいえない。しかし、上述の問題とともに、貴重資料の保管について、予期せぬ厄災を考慮すれば、当然ながら責任のおける相応の設備環境が必須である。短時間の判断を余儀なくされたが、以上の理由から、この時点で最良と思われる選択、すなわち、大岡昇平文学の原稿草稿類を含んだ研究課題で筆者が代表として取得している科研費による購入とし、立命館大学（衣笠）保管、とするに至った。

以下、該原稿について、調査考察を行う。

なお、本稿はこれまでの大岡昇平の原稿類に関する拙稿²⁾と同様、大岡昇平の自筆資料については、著作権継承者である遺族により、出版は認められていないため、影印の掲載や全文翻刻はかなわないが、調査考察および考察の根拠とする必要箇所についての部分翻刻は許可を得ることができたためになし得たものである。

三

今回確認することができた大岡昇平「野火」、『展望』昭和二六年三月号掲載分は、「満寿屋」製、薄緑野B4版20×20原稿用紙三六枚にブルーブラックインクで記されている。（右欄外に同インクにてノンブル「1」「36」。）初出誌における全三十章のうち「十一 朝」から「十三 行人」の三章分（現行では全三十九章のうち「二〇 銃」から「二二 行人」の三章分）から成る。周知のようにこの章は現行「野火」の後半部分の頭の箇所³⁾に当たる。『文體』誌掲載箇所を削除加筆訂正の上掲載してきた第一、二回を受けた部分、すなわち、廃刊によって昭和二四年七月号で中断した部分の後を受けた箇所という言い方もできる部分でもある。

「私」田村が無辜の比島女性を銃で射ってしまったところを受けて、この章は冒頭から「女」の「死」を受け止めつつ開始されている。『展望』昭和二六年三月号の冒頭に該当する部分、原稿

一枚目（八〜九行目途中）である。

（部分翻刻引用は20×20の原稿用紙の記載通り一行二〇字で示す。中線は削除箇所。）

女が女が死に、男が遁れ去つた以上、私はその家に止ることは出来なかつた。

単行本以下では「女が死に」は削除されている。報復や通報を恐れる「私」の生存にかかわる現実的判断として「男が遁れ去つた」ことこそが重要だという省筆であると考えられる。しかし、本文を読めばわかるように、現行に至るまで、比島女性殺害が重く「私」を領していくことには変わりはない。それでも第三回冒頭において、まずは女が死んだことを書き留めようとする姿勢が、「女が」と書いて一度消した後にもう一度「女が死に」と書き付けていくさまに明示されているといえよう。

そしてこの第三回原稿における加除が明らかにするのは、まさにこの比島女性殺害を主人公の「私」田村が他者との関係で、さらには自身の生のありかたについてどのように位置付けていくかという、「私」のその後のありように大きく影響していく問題なのである。

家を出てひとり歩いてきた「私」が、伍長等現役の日本兵と遭遇し一時、行動を共にしていく場面である。「私」は「自分が軍隊の組織の中にあたことを思ひ出し」て「泉兵団村山隊歩兵、田村一等兵であります」と組織の中の一員として所属氏名を名乗

り、合流していくという箇所である。「16」一八行から「17」一七行の約一枚分と「19」一六行から「21」二〇行の約二枚を順に翻刻し、みておこう。

（翻刻の後に初出誌本文の該当箇所も掲出する。）

*

＝＝『野火』第三回原稿＝＝

（先の翻刻同様、一行二〇字で示す。欄外表記の／は改行。■は判読不能。）

・「16」一八行目〜「17」一七行目

「16」

「自分は病院中を砲撃やられて、一人されて、ひとりでこゝにでよ

■「わたのであります」

「あ、お前か。鉄帽と被甲ぶつたがあるから、誰

⑦……………削除部分右欄外に「射たれ、一人でこゝまで来」

（削除）

「17」

かゝたらしいつていつてたんだ。今何処へ行

つてたんだ」と別■⑦

私は昨夜からの冒険のあらましを語つた。

「ふーん。」と上等兵兵長は疑はしさに私■の顔

を見た。「よくそんな町卜一人（ひとり）で行く来になつたな。銃はどうした？」

私は咄嗟に嘘を吐いた。

「帰りに谷へ落しました」

「ふむ。仕様がなぬ奴だ。……もつとも山本卜お前も」落■しちやつたな■「ブラウエンで落しち

やつたな」

「落■しちやつたも糞もあるものか。十■林（原田）の中を、やみくもに逃げて来たんだ。十

■手（ちよと）から離れたら、金輪際見つかるもんぢやねえ。そのうち誰か死んでる兵隊のがでも見

付つけていゝのさ」■

「そりや、さうだ。」と上等兵（伍長）は笑つた。

⑦……………「やはり」（削除）、上部欄外「もう一人の／やはり
 憔悴した／一等兵がいつた。」

①……………右欄外に「比島女を殺したことをのけて、」（これを
 削除し、）さらに左欄外に「女を殺したことをの
 けて、」

⑥……………上部欄外「原地人を／やつつける／なあ、病人に／
 しちや／木出来だ。／でも」（削除）

⑤……………左傍「と上等兵の」（削除し、）「と傍の上等兵を顧
 みて」

・「19」一六行目、「21」二〇行目

「19」

「出来るだけ随いて行きます」

「俺達は二②ーギニヤで人肉の肉まで喰つて

苦勞した兵隊■だ。一緒に来るなあいゝが、

まごまごすると喰つちまふぞ」

彼等は声を合せて笑つた。が、上等兵は私の

⑦……………左欄外に「あくらんだ」（削除し、）「あくらんだ」
 （再度削除し、）「雜糞を見せいつた。」

「20」

まごしてやがんだな」

「はい。知りませんでした」

「よし、俺達はこゝの芋を掘れるだけ掘つた
 ゆ、すぐ出発する。お前もまづきと掘掘れ。」

「何だ、そ■雜糞がやにふくらんでるぢやねえ
 か」

「塩であります」

「何、塩？」

「一斉に歓声のやゝなのが、三人の口から十
 洩れた。」

「そいつあ、豪儀だ。」どうだ、俺達にも少し

分けて貰へめえか。そんなに一人で持つて、も仕様があるめえ■一緒に連れてつてやるよ。

上等兵の口調は急に鄭寧になつた。私に

無論異議があるはずがなかつた。

「さうか。そいぢや、とにかく小屋へ行つて

分けて貰ふとしようか。たが、ちよつと嘗めさせろ」

と、彼等はそれそれ私の雑囊から一握り

づつ握ると、頬張つた。

⑦……………右欄外「泣く奴があるか。」「銃を落したのは補充

兵」(いづれも削除)。

⑥……………右欄外「つて行つたらい、だらう。」「(削除)。

上部欄外にも「つて行つたらい、だらう。」「よ

わしくお願ひします」(削除)。

⑤……………「声」(削除)。

④……………上部欄外「どまて、手に入れ、なんだ。」「下の町

へあります。」「ふうん。」「ほかもつと、何かなかつ

たか。」「塩だけであります。」「そんなはずは

■ねえ、が■。……えつと」伍／長の口調は

急に鄭寧になつた。

③……………下部欄外「取つて、喰やし、ねえよ。／ありや、冗

談だ」

②……………「各」(削除)。

「21」

「うめえ」

と口■ごもりながら、めいめいにいつた。

山本と呼ばれた一等兵の尻尻から涙がちよつ

ぱり汗した。鹹かつたからであらう。

「どこで取つて来たんだ」

と小屋へ歩き出しながら、別の兵士がいつた。

「下の村であります」

「もつとほかに何かないか」

「塩だけであります」

「そんなはずはねえがな。方々探したか」

「一軒だけであります」

「惜しいことをしたな■きつと何かあつ

たんだ。」「俺達もちよつと行つて見るか?」

「よせ、よせ。」「いづつが女をやつつけちやつて

ちや、もう駄目だ。こゝだつて、ゲリキが来る

かも知れねえ■」

私は振り返つた。見馴れた谷■丘の連続の

昨日野火を見たあたりの丘のあたりから、今

日もまた一條の煙があがつているのが、見えた。

- ⑦……………「かゆ」(削除)。
 ⑥……………上部欄外「芋に塩が／ありや／沢山だ。／一刻も早く／パロンボン／へ■行つた／方が勝だ」
 ⑤……………「いゆ」(削除)。
 ④……………「わかゆ」(削除)。
 ③……………右傍「海を挟んだ」「並の連りなつた先止」(削除)。
 ②……………左欄外「見馴れた丘の背が、海へ向つて低くなつたところ、」

*

＝＝＝初出『展望』昭和二六年三月号該当箇所＝＝＝

・原稿「16」一八行目「17」一七行目に対応する箇所

(同右誌一五七頁上段一五行「下段九行。／は改行を示す。)

「自分は入院中をやられて、一人でこゝにゐたのであります」
 「あ、お前か。鉄帽と被甲があつたから、誰かゐたらしいつて、いつてたんだ。今まで何処へ行つてたんだ」ともう一人のやはり憔悴した一等兵がいつた。／私は女を殺したことをのけて、昨夜からの冒険のあらましを語つた。／「ふーん」と伍長は疑はしさうに私の顔を見た。「よく一人つきりで行く気になつたな。銃はどうした?」／私は咄嗟に嘘を吐いた。／「帰りに谷へ落しました」／「ふむ。仕様がなぬだ……もつともお前も」と傍の上等兵を顧みて「ブラウエンで落しちやつたな」／「落しちやつたも糞も

あるものか。真暗な林の中を、やみくもに逃げて来たんだ。ちよつと手から離れたら、金輪際見つかるもんぢやねえ。そのうち誰か死んでる兵隊でも見付つけて取りやいのさ」／「そりや、さうだ。」と伍長は笑つた。

・原稿「19」一六行目「21」二〇行目に対応する箇所

(同右誌一五八頁上段一七行「一五九頁上段七行途中。／は同前。)

「出来るだけ随って行きます」／「俺達はニューギニヤぢや人肉まで喰つて苦勞してきた兵隊だ。一緒に来るなあい、が、まごまごすると喰つちまふぞ」／彼等は声を合せて笑つたが、上等兵は私の雑嚢に目をとめていつた。／「何だ、そりや。やにふくらんでるぢやねえか」／「塩であります」／「塩?」／歓声に似た声が、一斉に三人の口から洩れた。／「そいつあ、豪儀だ。……え、と」伍長の口調は急に鄭寧になつた。「どうだ、そいつを俺達にも少し分けて貰へめえか。そんなに一人で持つて、も仕様があるめえ。一緒に連れてつてやるよ。喰やしねえよ。ありや冗談だ」／「私に無論異議があるはずがなかつた。／「さうか。そいつあ、難有てえ。ぢや、とにかく小屋へ行つて分けて貰ふとしようか……だが、ちよつと嘗めさせろ」／彼等は争ふやうに私の雑嚢へ手を入れると一つまみづ、頬張つた。／「うめえ」／口ごもりながら、めいめいにいつた。一等兵の眼尻

に、涙がちよつぱり溜つた。鹹かつたからであらう。／＼どこで手に入れたんだ」／＼と小屋へ向つて歩き出しながら、上等兵がいつた。／＼下の村であります」／＼もつとほかになかなかつたのか」／＼塩だけあります」／＼そんなはずはねえがな。方々探したか」／＼軒だけあります」／＼「惜しいことをしたな。もつと何かあつたんだ……どうだ。俺達もちよつぱら寄つて見ようか？」／＼よせ、よせ。芋に塩がありや沢山だ。一刻も早くパロンボンへ行つた方が勝たつたところ、昨日野火を見たあたりから、今日もまた一條の煙が真直にあがつてゐるのが、見えた。

*

四

先述したように、注目すべきは田村が、その比島女性殺害を、当初は出会つた「同胞」たちに告げていたという記述である。翻刻「17」末に「④」で注記したように、これは改稿され「(比島)女を殺したことをのけて」と、比島女性殺害は同胞に秘匿し続ける、という設定に変更となる。

しかしこの改稿が即座になされたものではないこと、田村が比島女性殺害を同胞に告げる人物であるものとして小説を進めようとしていたことは、つぎの二つの記述から明らかである。すなわ

ち、第一に、同じく翻刻「17」の末尾「⑤」に示したように、「原地人をやつつけるたあ、病人にしちや大出来だ」という伍長の反応が欄外、つまり追加した記述なのであり、いったん少なくとも「ふーん。」に続く数行は書き進めていたであろうこと、そののちもなお比島女性殺害告知の設定を温存し続けていることである。第二には、さらに「21」一五行目に至つてもなお、同胞に「こいつが女をやつつけちやつてちや」と言わしめて、「私」田村が無辜の女性を殺害したことについて、これを同胞と共有していくさまが明示されているのである。

原稿段階で、田村の比島女性殺害が「口外」されてはいない、田村個人の秘密であると、欄外吹出しなどの加筆訂正部分ではなくして原稿用紙の罫目に順に一文字一文字明確に記されるのは、「22」一四行目に至つてからである。該当箇所翻刻を引いておく。

「22」一一行目から一八行目

今は私は私より馴れた^①僚友と共にあり、
塩を與へたといふ^②ことによつて、彼等と^③友好^④的關係にある。この關係に入つてしまへば、
私の十字架も殺人は、私がそれをいはず^⑤はない以上、この社倉の中にあつては存在しないと同然だ。そして私はすべて比島の敗兵と同じく、
ボンガボンからセブに脱出^⑥し、生還すること
も出来るのだ。

- ⑦……………上部欄外「彼等止」(削除)。
 ①……………上部欄外「友姉」(削除)。
 ②……………上部欄外「昨由からの私の冒険も」(削除)、「比島の村を出て以来の私の冒険」(削除)、「比島の村に／＼おける私の」
 ③……………左欄外「止むを得ざるに」**■**「**■**ず退却した**■**」
 レイテの敗兵と同じ資格で、パロンポンから」

戦場であれ、無辜の女性を殺害したことを「口外しない」ことが、祖国の社会への「生還」へとダイレクトに繋がっていく記述は、殺害が社会的に決して受け容れられないことであるという思念に、強固に支えられている。殺人者は社会には容れられない。殺害の事実を同胞に告げ、共有していくという当初の記述からの変更によって、秘匿することにより、殺害は田村ひとりがいわば孤独に背負うべき問題として焦点化されていく。この、社会に参入できない殺人を秘匿するという設定は、田村における「社会的関係」への希求をいっそう切実なものとしていったといえる。

大岡の筆は、その後も田村に、口外させないという原稿段階での変更によって一人で背負うことになった殺害した比島女性を想起させ続ける。初出誌で引用しておこう。

まず、先に引用してきた同胞との場面ののち、投降を試みるも自身が殺人者でありその資格がないと断念する場面。

私はそのゲリラの女兵士が、私が数日前海岸の村で殺した女に似ていると思つた。／＼忘れてゐた。私は一人の無辜の人を殺してゐる身體であつた。同胞に会つたため、私は生還の希望を持ち、さらにその延長として、降服によつてまで、命の助かる手段を求めてゐるが、さうだ、私はたとへ助かつても、生きて行ける身體ではなかつたのだ。

〔十七 降服の心理〕「単行以下 二二六 出現」、
 『展望』昭26・4、傍点原文)

あるいは、俘虜になつてからの部分。^③

部隊を離れてからの経験について、私は誰にも語らなかつた。比島人の女を殺したことは、戦争犯罪者に加へられる恐れがあり、たとへその肉を喰はなかつたにせよ、僚友を殺したことを俘虜の仲間がどう思ふかわからなかつたからである。私は求めて生を得たのではなかつたが、一旦平穏な病院生活に入つてしまへば、改めてその中断を求める何の根拠もなかつた。

〔二八 狂人日記〕「単行以下 二二七 狂人日記」、
 『展望』昭26・8)

そして重要なことは作品の末尾、食人をしなかつたことで「神に栄えあれ」と神を讃えて終わる作品が、「黒い太陽」すなわち日蝕であり大岡が古人の解釈として「神様が、怒つたしるし」とまでいうものしか見せない、という結末である。ここにおいて大岡は、田村に、食人はしなかつたと思起させるものの同時に比島

女性をも「殺しはした」と殺人の但し書きを忘れさせない。これこそが「黒い太陽」しか見ることができないという田村の姿が指し示す負の側面の表徴である。最終章では孤独な彷徨と社会への希求を強い倫理観をもつて生き、しかも戦後社会では「精神病院」すなわち社会から疎隔された場所に生きざるを得ない田村を救済しようとして神を讃えさせてはいる。しかし、殺害の重みは、「戦争犯罪者に加へられる恐れ」という一層現実的な秘匿を選んだことをも含め、戦時の同胞にも戦後の社会でも秘匿し続けたことの重みとして、こうしたマイナスイメージの表現によって最末部において強く示されていくことになるのである⁵⁾。

暗い空に「際黒く、黒曜石のやうに、黒い太陽が懸つてゐた。もう遅い。／＼この草の中を人が近づいた。足で草を掃き、滑るやうに進んで来た。今や、私と同じ世界の住人となつた、私が殺した人間、あの比島人の女と、安田と、永松であつた。「中略」／思ひ出した。彼等が笑つてゐるのは、私が彼等を喰べなかつたからである。殺しはしたけれど、喰べなかつた。殺したのは、戦争とか神とか偶然とか、私以外の力の結果であるが、たしかに私一人の意志の及ぶ範囲では喰べなかつた。だから私はかうして彼等と共に、この死者の国で、笑つて黒い太陽に照されてゐることも出来るのである。

〔三〇 死者の書〕「単行以下」〔三九 死者の書〕、昭26・8)

無辜の比島女性殺害の問題はこのように最終場面まで「私」田村の行動や思考を限定せざるを得ないものとして記され続けている。この殺害を誰にも話さず、「人とも交わることが出来ない體」(「展望」昭26・2)という意識を、同胞と共有して薄めるなどということをさせずに秘匿させ続けて彷徨させていったこと、それが、社会的関係を希求、帰還しても戦後の社会にも違和を感じ、社会の「外」として位置づけられている「精神病院」に在るといふありやうを強く規定していった設定であつたといえるのである。

注

(1) 青木正美氏収集による作家の自筆原稿集。保昌正夫監修／青木正美収集・解説『近代作家自筆原稿集』(平13・2、東京堂出版)。

(2) 以下、いずれも拙稿。

・「大岡昇平手稿「俘虜記」の考察——僚友・「私のプライド」・俘虜の〈恥〉——」(『論究日本文学』第96号、平24・5)

・「三島由紀夫と大岡昇平——『聲』創刊前の「鉢の木会」時代を中心に——」(『三島由紀夫研究』⑫、平24・6)

・「大岡昇平における〈不条理〉——俘虜・赤十字・カミユ——」(『昭和文学研究』第65集、平24・9)

・「草稿からの分化、作品生成へ——大岡昇平「出征」と『野火』——」（『国文目白』第52号、平25・2）

・「大岡昇平『野火』草稿にみる『俘虜記』との分岐、差異化と生成——「動物的」な「恐怖」「愛情」から「社会的感情」「生物学的感情」へ——」（『立命館文學』第六三〇号、平25・3）

(3) なお単行以下では「二八 飢者と狂者」において、初出（一九 飢者と狂者）、『展望』昭26・5）には存在しなかった二文が附け加えられている。すなわち、塩が尽き食人を思う「私」田村が「躊躇し、延期した」（傍点原文）後の箇所、「新しい屍体を見出す毎に辺りを見廻したのを憶えてゐる。私は再び誰かに見られてゐると思つた。」（傍点原文）のあとに加えられた、比島女性殺害を強く省みる次の二文である。「比島の女ではない。私は彼女を殺したただけで、食へはしなかつた。」（昭27・2、創元社『野火』）

(4) 大岡昇平「黒い太陽——作者の言葉」（昭28・8）

(5) 「黒い太陽」の問題も含め、このあたりについては拙稿「大岡昇平戦後の出発『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』」（『国文目白』第23号、昭59・2。拙著『大岡昇平研究』（平15・10、双文社出版）所収）および拙稿「大岡昇平『野火』論——〈社会的感情〉の彷徨——」（『国語と国文学』第70巻第7号、平5・7。同前拙著所収）等で考察している。

附記

特に記さない限り大岡昇平作品の引用は『大岡昇平全集』全二三巻別巻一（平6・10～平15・8、筑摩書房）に拠つた。

／＼は改行を表す。初出誌等手稿以外の旧字は新字に改めた。

本稿は文部科学省科研費採択課題（基盤研究C 課題番号25370246 代表 花崎育代）「大岡昇平文学の基礎的および総合的研究——創作ノート・原稿類を含む——」（二〇一三年度～二〇一八年度（予定））による研究を含むものである。

（はなざき・いくよ 本学教授）